

# ナラトロジーと中世日本文学研究の交差の可能性 ——『神道集』「那波八郎大明神事」を基にした物語論の再検証と本文分析——

ゼバスティアン・バルメス

## はじめに

ナラトロジー (narratology) とは、物語論、すなわち〈物語〉 (narrative) を研究する文学理論の分野である。ナラトロジーは、一九一六年から一九三〇年までのロシア・フォルマリズムを先駆とし、主に一九六〇年代後半からミハイル・バフチン (Mikhail Bakhtin) の影響を受けたフランスの構造主義において展開された。一九八〇年代後半からはテクスト自体だけでなく、それぞれの作品の背景や作者にもより配慮するようになり、また文学以外の物語を対象とする研究分野の影響を経て、更に発展した。現在の欧米における文学研究では、ナラトロジーは主要な専門分野の一つとなっている (Balme [一〇一二] 一〇一頁)。ヨーロッパ文学の研究では、ナラトロジーの方法を用いる論究だけではなく、〈古典的ナラトロジー〉の題材となつた近代小説と大きく異なる中世文学を中心にナラトロジーの概念の再検討も行われている。<sup>〔1〕</sup>一方で、日本における中世日本文学の研究で、ナラトロジーを取り入れた論考はほぼみられない。だからこそ、論理に關しても、また中世日本文学の〈語り〉 (narration) に關しても、根本的な発見が未だ可能であり、ナラトロジーと中世日本文学研究の双方にとつて、そのような論究が有益だと稿者は考へる。その両面的な可能性を示すことが本稿の目的である。

本稿では、十四世紀半ばに成立した『神道集』の「物語的縁起」の一つである「那波八郎大明神事」を例として扱う。ナラトロジーと『神道集』を合わせて論じるには、まずそれ研究の現状を確認する必要がある。理論研

究への貢献としては、〈語り手〉 (narrator) に関する『神道集』の含意に注目する。統いて、〈距離〉 〈視点〉 〈語り手〉 にまつわる最新の理論と日本文学の特徴をふまえたうえで、「那波八郎大明神事」と同系統の在地縁起の本文を比較しながら分析し、「物語的縁起」の〈語り〉の方法を通時的に考察する。

## 一 ナラトロジーと日本古典文学の研究——研究史と現状

本稿では欧米におけるナラトロジーの研究史を詳しく振り返る余裕はないが、「那波八郎大明神事」と関連資料の分析に応用する概念の第四節における紹介は、先行研究の批判と理論の再検討にもとづいている。それについてはドイツ語で刊行された拙著『ナラトロジーと日本古典文学』 (Balme [一〇一二])において詳述している。本稿の文中で、著者名を略し ( ) 内にページ数のみを示した場合は、拙著を指すものとする。ただし、文学理論の一分野としてのナラトロジーの研究史については省略するとしても、ナラトロジーと中世日本文学研究の交差の有意性を論じるうえでは、日本における日本古典文学とナラトロジーに關する先行研究を考慮に入れるべきであると考へる。

現在、中世ヨーロッパ文学の研究ではナラトロジーの研究が盛んになつてゐるのに対して、日本における日本古典文学の研究では、平安時代の物語文学——ときには日記文学——こそナラトロジーの方法で分析されることがあつても、中世文学の研究でナラトロジーはほぼ応用されていない。平安文学でナラトロジーがより利用されている原因はいくつか考えられるが、まず

Abstract

『源氏物語』の古註釈で既にナラトロジーの分析においても重視される「詞」と「心」の区別が行わされた点が留意される。また、直接話法に関する、言葉を特定の作中人物に託する注記が加筆され、さらに江戸末期においては中島広足の『あまのくみつ』に紹介された「移り詞」という重要な概念が定着した。その上、〈物語〉が narrative の訳語として使われており、親しみやすいという可能性もある。一方で、中世文学の〈語り〉はパフォーマンスに関する術語となることが多いため、narrative と交わる」とはまれにしかなかつた。平安時代の物語は、中世の説話・軍記物語・お伽草子などと比べて、プロットより作中人物の心理描写を重視することが多く、また本文の長さや構想に関しても、ナラトロジーの基礎となつた一八世紀以降の長編小説により近いであろうというのも原因になりうる（一五八〇一六〇頁）。その上、平安文学では言動の主体が明らかでないこともあるので、ナラトロジーの研究でしばしば分析の対象となる〈視点〉の推移などの問題と結びつく面がある。

また、一九七一年に創立した物語研究会（モノケン）が平安文学研究者のナラトロジーへの関心を促進させた。特に一九七五年から一九八〇年まで同研究会の年間テーマはすべてナラトロジーに関するものだった。物語研究会は構造主義とポスト構造主義の思想を日本に導入した学会として知られていて、三谷邦明、藤井貞和、高橋亨の各氏など、同研究会の代表的な研究者が、三谷邦明、藤井貞和、高橋亨の各氏など、同研究会の代表的な研究者たちが主に引用する理論家から明らかのように、実際のところ構造主義よりポスト構造主義に重点を置き、逆に当時のナラトロジー研究（ポスト構造主義の研究も含め）をほぼ受容していない（一六九〇一七〇〇二一五頁）。ロラン・バルト（Roland Barthes）の『物語の構造分析』（原著一九六六年）の日本語訳が一九七九年に刊行された後、次にナラトロジーの主要な研究書として訳されたのはジエラール・ジュネット（Gérard Genette）の『物語のディスクール』（原著一九七二年、一九八五年訳）である。その後、主に一九八〇年代後半から一九九〇年代前半までナラトロジーの著書が相次いで日本語訳として刊行された。<sup>2</sup>それにもかかわらず、一九八〇年代後半にナラトロジーの用語を一層多用するようになる平安時代の物語文学の研究者は、ジュネットを始め、それら新しく出版された研究書に対してはほぼ配慮しなかつたようだ（一七一頁）。

今からみると約二十年前から、ナラトロジーを通して日本古典文学を研究するうえでの新しいアプローチが展開しはじめる。マイケル・ワトソン氏（Michael Watson）の『平家物語』論（Watson [一〇〇一]）や竹内晶子氏の世阿弥論（Takeuchi [一〇〇八]）など、中世文学もナラトロジーの方法によって研究されるようになり、一〇〇九年から英語やドイツ語の研究で上代文学と近世文学も研究の対象となつた（Steineck・Müller [一〇〇九] と Moretti [一〇〇九] の特集など参照）。ドイツ語圏の論文の特徴として、特定の理論がより忠実に応用されているといえる（二二九頁）。

一方で、日本文学の研究によつてナラトロジーの弱点が明確になること（Steineck・Müller [一〇〇九] 四九一、四九五頁）と、理論の改訂あるいは補足の必要が生じることの可能性（Watson [一〇〇四] 一一六頁）について指摘はされている、日本語における〈人称〉という文法範疇を疑問視する陣野英則氏の貴重な論文（陣野 [一〇一六]）までは、そのような理論研究がなかつた。それゆえ、そのような問題に応えることが一〇二二年の拙著の課題となつた。ただし、日本文学関連の先行研究は主に〈古典的ナラトロジー〉にもとづいていたが、現在のナラトロジーでジュネットなどによる定義は、もはやそのままでは有効でないものとされている。また、認知言語学などをふまえた〈ポスト古典的ナラトロジー〉の新しい定義こそが概念の普遍性を証明しているので、日本文学の特徴を論じるにはおおよそ理論の改訂よりも、最新のナラトロジー研究を知ることが決定的である。もつとも、日本文学の研究が理論について重要な示唆を与える場合もある。本稿では、『神道集』を基にして〈語り手〉あるいは〈表現主体〉（第三節）と〈距離〉（第五節）を論じる。

## 一 『神道集』の先行研究の傾向

『神道集』とナラトロジーの双方に関する研究の有益性が評価できるようには、まずは先行研究の傾向を概観的に紹介する。

筑土鈴寛は『神道集』の五十章を二十一章の「公式的縁起」、より自由な内容を持つ二十篇の「物語的縁起」、そして九篇の「神道論的なるもの」に分けている（筑土 [一九六六] 二八三～二八五頁）。先行研究で『神道集』の内容

を「五十話」と言うことが多いが、「神道論的なるもの」はもちろんのこと、実は「公式的縁起」の中で、本地などの情報のみ記載し、ストーリー（話）を語らない章も多い（四八、三九八頁<sup>(3)</sup>）。本稿では「物語的縁起」のみ取り上げることにする。「物語的縁起」は神の前身における苦難を語る本地物語である。すなわち、作中人物の苦悩が中心であり、話の最後に神として現れる。章の結末において——ストーリーを既に語り終えた時点で——語り手がそれぞれの神の本地仏について教示する。特に上野国の六話（あるいは筑土に「公式的縁起」とされた「上野国一宮事」を含めた七話）は近世でも語られ、それぞれの縁起に関わる資料が群馬県に多く残っている。

ここで、「神道集」の先行研究を整理すると、おおよそ次ののような分野に分けることができる。現在は、既にたくさんの論文があるが、括弧にそれぞれの分野の代表的な研究者あるいは著作を記す。

- ① 現代語訳と注解（貴志「一九六七」）
- ② 成立史（福田「一九八四」）
- ③ 本文研究——古本系統、流布本系統、真名本『曾我物語』との関係（村上「一〇〇六」）
- ④ 宗教史の研究
  - 一 思想史——本地垂迹思想（菊地「一九八九」）
  - 二 寺社の歴史（松本「一九九六」）
  - 三 唱導資料（表白集など）との関係（有賀「一〇一五」）
  - 四 諫訪信仰（二本松「一〇一四」）
- ⑤ 話型の研究——文学あるいは民俗学の視角から（福田「一九八四」）
- ⑥ 物語の展開——お伽草子としての本地物への影響（松本「一九九六」）
- ⑦ 在地縁起の研究——新出資料の紹介（翻刻と解題）と東国文化との関係（大島「一〇一四」など、大島由紀夫、徳田和夫、榎本千賀、青木祐子各氏の論文）

先行研究はさまざまなものがあるが、文献研究として優れている論考が多いといえる。ただし、『神道集』の〈語り〉（narration）については、未だあまり研究されていない側面もある。思想史の研究を除くと、先行研究

では実証主義的な要素が強く、むしろ『神道集』を本格的に文学作品、すなはち芸術作品として扱う論文はほほないのでないだろうか。ナラトロジーの方法による研究はその一つの可能性だと考える。

先行研究の中で、ナラトロジーと一番共通点があるのは、福田晃氏の話型研究であろう。福田氏は、物語言説よりあくまでもストーリーに注目し、その方法として梗概を作り、その梗概に数字やアルファベット文字を付けた「叙述要素」（福田「一九八四」七〇六頁）に分けることによって、「叙述構造」もしくは「叙述構成」を明確にしようとする。説話文学だけではなく、昔話の研究も考慮に入れ、関敬吾の『日本昔話大成』（第十一巻、角川書店、一九八〇年）の目録も参考にしている（福田「一九八四」七〇七、七一二頁）。しかし、『神道集』卷八に所収されている第四十八章「上野国那波八郎大明神事」とその類話として検討されるそれぞれの話の関係は薄いという印象を免れない。福田氏は「那波八郎大明神事」には九州と鳥取県に採集された（同前七一〇頁）「竜神と祭祀」という伝承と「強い繋がり」（同前七一三頁）があると述べているが、考察においては「……が」「ところが」（同前特に七一二頁）のような逆接表現があまりにも多く、説得力を弱めている。より根本的な問題として、福田氏は常に「原話」を探求している点がある。一つの原話がなかつたにしても、「那波八郎大明神事」を複合的な物語として考え、それぞれの「叙述要素」の出典を見出そうとする。つまり、伝承者、編纂者あるいは作者の発想の可能性を考慮に入れず、すべての「叙述要素」が既に存在していたことを前提にしているのである。しかし、そこに論理的な矛盾が潜んでいる。原話を必然とする原理に従うと、他の説話集などにみつかる原話にもまたそれの原話があつたはずだ。図式化するとそれは系図になり、それをたどつて遠い昔まで遡れば、とうとう一つだけの原話が残るはずであるが、言うまでもなく、そのような物語の発生は考えにくいだろう。

福田氏はあくまでも実証主義的影響を受けながら民俗学の視角から『神道集』を位置づけている。また、近世に書写されたお伽草子・古淨瑠璃などの形態をとる本地物の研究でも、本文比較を通じて物語言説については論じられていても、やはり実証主義的な傾向が強い。また、高木「一〇〇一」のよ

うな例外はあるものの、いのうな傾向は他の中世文学研究にもみられる。本稿では、同文やプロットの類似性にもとづく「影響関係」よりも、〈語り〉に関する特徴に注目し、〈語り〉の技法としての「影響関係」も存在することを論じる。

### 三 『神道集』とナラトロジーの研究の可能性

ナラトロジーの方法をふまえた、あるいはナラトロジーの概念を究明する論考にとつては、『神道集』が非常に貴重な資料である。その理由として、四つが考えられる。

(一) 文芸史における『神道集』の位置の研究にはまだ余地がある。説話集として扱われることが多いものの、物語構造として「物語的縁起」は説話よりも本地物の性格が強い。お伽草子としての本地物の前駆としては認められているが、宣命体という表記とは別に、声によって再生するテクストとして考えれば、文体のうえでお伽草子などとの違いはそもそもどのようなものだろうか。〈語り〉に関して、説話文学や軍記物語との比較にも検討の余地がある。

(二) 殊に上野国の諸縁起にさまざまなバージョンがあり、群馬県に多くの写本が伝わる。本文批判を通じて伝承関係は既に調査されているが、その文体と内容を研究するうえで、ナラトロジーの応用も有益であろう。

(三) ここまでナラトロジーをまず方法としてとらえてきたが、『神道集』の〈語り〉が『源氏物語』ほど複雑ではなかつたとしても、『神道集』から理論に関する研究成果も期待できるだろう。というのも、多くのバージョンを比べることができるので、ナラトロジーの特定の範疇の歴史的特徴、あるいは意義を究明するのに最適な資料だからである。

(四) そのような通時的ナラトロジーの研究の他に、より根本的な考察も可能である。『神道集』は「集」として、語る章と語らない章——すなわち物語であるものと物語でないもの——を両方含んでいる。「物語的縁起」の表現上の特徴として「<sup>ヲ</sup>取<sup>ルニ</sup>物<sup>ソ</sup>无<sup>キ</sup>」「申<sup>セハ</sup>中<sup>ニ</sup>愚<sup>ナリ</sup>」などの決まり文句があり、一方で「其ノ本地<sup>ヲ</sup>尋<sup>レハ</sup>」などのように、ストーリーを語らない「公

式的縁起」にしか使われない決まり文句もある。しかし、「……ト申セハ」のように両方にみられるパターンもあるので、やはり同じ声による「言説」だと見てよいだろう。

こうした(四)の問題は、〈語り手〉という範疇に関してどのような意味を持つのだろうか。通説では、実在している〈作者〉とは異なる〈語り手〉によって話されるのは〈物語〉、あるいは〈虚構物語〉のみであり(詩歌にも〈詠作主体〉、もしくは〈抒情詩の「私」〉と呼ばれる〈作者〉と異なる表現主体を認めるべきではあるが)、これこそ〈物語〉、あるいは〈虚構〉の独自性とされている。〈語り手〉の必然性の原因として、〈作者〉である人間はそのままテクストの中に存在できないということがしばしば挙げられる。しかし、先述のようないくつかの構成がその通説を相対化している可能性がある。例えば、メールを書くにあたつても、表現を何度も変えながら文章を推敲することがある。こういつた過程の結果として出来上がった文章に内在する声は、はたして書き手そのものの声だろうか、あるいはむしろその実在する人間とは別の表現主体が成立したのではないだろうか。このような表現主体は読む過程で読者によって人間化されてはいるが、根本的にはテクストの、あるいはコミュニケーションに関する機能にすぎない(三九八~四〇〇頁)。また、これから分析する資料からも明らかなように、物語の〈語り手〉が最も顕著に見えるのは感情による評価が表現される箇所である。感情というものは、そもそも評価の方法としてとらえることができ、人間のコミュニケーションでは、感情が欠かせないものとなつてている。また、コミュニケーションの中で表す感情は、必ずしも実際の気持ち、もしくは実感を反映するとは限らない。それは嘘というより、社会的に、すなわち行儀として期待される感情の場合が多いといえる。このようなことをふまえれば、〈作者〉と〈語り手〉の関係に似たように、〈語り〉以外でもより一般的な区別として、実在の〈話者〉とテクスト内の〈表現主体〉が考えられるということを『神道集』の構成は示唆するのではないだろうか。

以上をふまえたうえで、ナラトロジーを適用した『神道集』研究はどのような形式をとることができるかということを示すため、「那波八郎大明神事」

の分析を行う。この一篇はやや短文であつても、異なる語り方がくつきりと区別できる資料として最適である。また、在地縁起も多く現存する。テクストの分析にあたつては〈距離〉、さらに〈視点〉と〈語り手〉という二つの範疇に注目するので、それらをまず定義する必要がある。

#### 四 理論的基礎——〈距離〉〈視点〉〈語り手〉

ナラトロジー研究の範疇の中では、〈時間〉〈作中人物〉などよりも、第五・六節の分析に応用する〈距離〉〈視点〉〈語り手〉のほうが主に〈物語言説〉(discourse, 仮 discours) に関するものである。この三つはジュネット「一九八五<sup>a</sup>」の〈叙法〉(=〈距離〉とパースペクティヴ) と〈態〉に倣つてゐるが、近年の研究と拙著における再検討をふまえ、ジュネットの定義と異なるところがある<sup>(4)</sup>。

〈視点〉(perspective) はおそらくナラトロジーの最も根本的な概念である。ある作中人物の視点によつて語ると、その人物の感覚・感受が再現されるのである。つまり、物語の経験性の度合いが高まる。また、テクストのある部分にわたり一貫してその視点が保たれるとき、それを〈焦点化〉(focalization) という。なお、〈焦点化〉が作中人物との同化に導く場合があるが、結局それは個人としての聞き手・読者の受けとめ方によるので、必ずそなだとは言い切れない(三四六~三四七頁)。

視点は、テクストにおける情報の内容のうえでも表現のうえでも標示される。また、内容において、評価、時空間的位置、具体的な知識などはある作中人物あるいは語り手の視点の記号となる。そして語られた感覚は焦点化の開始となることが多く、日本古典文学の狭義での焦点化はほぼ垣間見の場面に限られる。「見れば」という表現が焦点化の標記になることが特に頻繁にあるが(三五四~三五九頁)、一方では表現における視点の標示、すなわち視点が物語言説においてはつきり示されることに関しては、その言語の特徴に留意する必要がある。

ある視点の最も明白な記号となるのは直示表現であろう。「此處」「今」という表現主体の時空間的位置に關する言葉の他に、人称代名詞「我」「君」

などが典型的な例である。直示表現とは、表現主体を中心とする言葉なので、表現主体の正体がわからなければ理解ができない表現になつてゐる。ただし、「我」「君」は三人称を指す場合もあるので、必ずしも直示表現として用いられていると限らない。日本語において多くの直示表現は指示代名詞だが、ここも注意しなければならないことがある。「この」「その」などは直示(deixis)だけでなく、前方照応(anaphora)という、すなわち文の前の方にあつた言葉を指す機能でも多く使われてゐることだ。それがまた話法の問題と関わるのである。日本語において、「とて」などの表現は作中人物の直接言説と間接言説の両方に使えるので、話法の分類に際しては直示表現、感動詞などの主観的な表現の有無が決定的であり、「この」「その」の使用が重要な手がかりになつてゐる(三四六~三四七頁)。また、尊敬語と謙譲語も直示表現と受けとることができる(Coulmas「一九八六」一六七頁)。地の文においては、特に「給ふ」という尊敬語の補助動詞が語り手の視点を標記し、作中人物を通して焦点化されている箇所に「給ふ」が一時使用されなくなる。そして地の文に再び現れると、その焦点化の終了の目印となることがある(Balme「二〇一〇」八五頁)。

直示表現の他に、モダリティによつて作中人物あるいは語り手の視点が指標される。日本古典文学に多出する表現は「む」「べし」などの助動詞だが、「けり」も時制だけでなく、語り手の視点を表すモダリティの表現として理解できる。焦点化された箇所に「けり」の数が減る場合があることも「けり」とモダリティの関係を示唆してゐる(三四七~三四八頁)。また、情意性形容詞は話者(あるいは表現主体)の気持ちを表すものとされてゐる(三四八~三四九頁)。『神道集』の「物語的縁起」の地の文に多出する「哀れ」のような表現は、観察された対象と感覺する主体の両方に関する言葉として注目された(三五一~三五二頁)。

視点が言語によつて標示されるうえで、ジュネットとミーケ・バル氏(Mieke Bal) が主張した〈叙法〉(mood, 仮 mode) もしくは視点(「誰が見ているのか」と〈態〉もしくは〈声〉(voice, 仮 voix、「誰が話してゐるのか」)の絶対的な区別<sup>(5)</sup>は無理かもしない。そして、バル氏が論じたように、ある視点は他

の視点に埋め込まれることがある（一一〇頁）。ジユネットやバル氏は声と視点をまったく異質なものとして扱っているために、語り手が視点・焦点化の主体になることができないと考えていた<sup>⑥</sup>。その後の研究では語り手の視点も注目され、認知言語学の研究が示すように、実は「語り手」とはそもそも視点のレベルである（一〇四頁）。人物として紹介されている語り手ももちろんあるが、基本的に物語の直示的中心としての「語り手」はあくまでもテクストの機能である。ただし、テクストにおいて人物として具体化されなかつたとしても、読者によって人間化され想像されるものである（八四頁）。「語り手」という視点が常に枠としてあり、作中人物の視点は必ずその中に埋め込まれている。すなわち、視点が語り手から作中人物に移るというような「元性」は存在せず、語り手自体が作中人物の視点を再現している。以上のことから、作中人物を通して焦点化された件で、一度「けり」などで語り手の視点が標記されたとしても、作中人物による焦点化がそこで終わつたとは限らない（三七五頁）。語り手の視点が潜在的であつたとしても、枠としてそれは常にあるはずで、おおよそ潜在的な語り手であつても、たまにはその視点が表現上で露わになるのである。

『神道集』は、本文に散見する表現からすると、口頭で語られることと文字によるテクストとして読むことがいざれも想定されている。『神道集』の語り手は作中人物として設定されていないにしても、読者には唱導師として想像されていたに相違ないであろう。唱導師によって語られる場合、テクスト内の語り手と実在の人間としての唱導師の声が一致していた（四〇一～四〇三頁）。また、補助動詞「給ふ」などの使用で明確になるように、その語り手は社会的な地位として、自分をそれぞれの神を崇める農村の人々と等しく位置づけている。

「視点」や「語り手」と比べて、「距離」（distance）という概念は理論研究の対象となつたことが比較的少ない。ジユネットの理論では、「距離」は物語説と物語内容の距離を意味する（ジユネット「一九八五a」一九六頁）。既に一九五五年に「距離」（Distanz）を術語として使つたエーバーハルト・レメルト（Eberhard Lämmert）も述べたように、この「距離」は読者が物語世界の出

来事に対して感じる距離に相当すると考えられる（Lämmert「一九七五」六九頁、またMartínez・Scheffel「一〇一六」五〇頁、拙著「三六頁」を参照）。ジユネットの定義によると、小さな「距離」とは、語り手がおおよそ潜在的であると同時に、叙述が詳細である、というように基準が二つある（ジユネット「一九八五a」一九三頁）。すなわち、小さな距離の叙述法は「示すこと」のようなもので、大きな距離は「語ること」に共通するということである。しかし、「示すこと」と「語ること」と違い、「距離」は二元論的な範疇ではなく、むしろさまざまな度合いが可能である。より詳しい定義も提唱されたが、叙述における情報量以外の基準はやはりすべて「語り手」に還元でき、「距離」は「語り手」に注目することで計れるものと扱われるようになつた。しかし、ジユネットと違い、「語り手」を視点の主体としてとらえると、それらの基準が「視点」の問題になつてくる。すなわち、「距離」の定義を改訂しなければ、ほぼ視点と重なり、余分な範疇となつてしまつのである。つまり、情報量の程度のみを「距離」の基準とするのが妥当と考えられる（一四一、一四三、一五〇、一五一～一五三頁）。

## 五 『神道集』「那波八郎大明神事」の「語り」

「物語的」をナラトロジーの術語としてとらえてみても、あるいはまた日本文学史においてさまざまなジャンルを一括して言う表現として使つてみると、『神道集』の「物語的縁起」はいかにも「物語的」である。しかし、「物語的縁起」でも、その「物語性」（narrativity）の度合いが常に高いといふわけでもない。有賀夏紀氏のいう「本地説」（有賀「一〇一五」第二章）、すなわち人間が神として現れた後に、章の結末に挙げられる本地などの説明の部分は、「公式的縁起」にも共通し、「物語性」がないことは先述した。「物語性」というのは、マリー＝ロール・ライアン氏（Marie-Laure Ryan）によると、物語世界の時空が最も基礎的な前提になつてゐるが、物語世界に精神的次元（mental dimension）がなければ、物語として認めない聞き手・読者も多いであろう（Ryan「一〇〇七」二八～三二頁）。いざれにせよ、精神的次元が「物語性」の度合いに決定的である。また、モニカ・フルーダニク氏（Monika Fludernik「一

九九六〕が論じるように、〈物語性〉は〈経験性〉(experientiality)としても定義できる。

『神道集』「那波八郎大明神事」は梗概において、三つの部分に分けられる。福田氏はそれらを「〔発端〕八郎の祟り」「〔展開〕八郎の鎮まり」「〔結末〕八郎の神明示現」と名付ける。発端部で、群馬郡の地頭の息子である八郎満胤は八人の兄弟の中でも最も優れているため、出世し、総領になり、また父の死後に上野国の目代に昇る。八郎を妬む七人の兄弟は弟を殺すことを計らう。そこに至るまでの、上野国と都の両方を含み、かつ数年間にわたる物語の時空は、ここで初めて具体的な行動の場に縮約する。

七人ノ舍兄達ハ 晴思レトモ、 国ノ目代ナル上ベハ、 其ノ下知ニ随ケル。 七人ノ舍兄達ハ 八郎カ下知ニ随フ事ヲ 安カラヌ妻ニ思ビ、 七人舍兄達与力同心シテ、 八郎満胤ヲハ夜討シツヽ、 尸ヲハ石ノ唐横トニ入テ、 高井ノ郷、 鳥喰ノ池ノ辰巳ノ方ニ當タル、 蝋ヒ喰ニ池中嶋ニ當タル、 蝋塚カ岩屋ト云ケル、 岩ノ中ニ深ク収メケリ。

(赤木文庫本、卷八「以下同様」、一四〇—一四一)

この件において〈語る時間〉と〈語られる時間〉の割合がより大きくなり、

すなわちストーリーに対して〈語り〉の速度が少し遅くなり、殺人の動機が語られている。それでも、「那波八郎大明神事」の発端において、作中人物の感情の叙述は非常に少ない。この箇所にみる「晴思レトモ」「随フ事ヲ安カラヌ妻ニ思ビ」の前は、「帝ト御感有テ」のみである。作中人物の発話あるいは心内語が再現されることも一切なく、夜討ちの叙述で、聞き手・読者は初めて、ある程度具体的な場面を想像しうる。高井の岩屋の外観などは描写されることがないものの、「鳥喰」「蜡塚」のような地名により、不気味な印象を受けたり、不吉な予感を抱いたりする。

ここまで物語においては、語り手の存在が比較的控えめといえる。それ

でも、冒頭の定型句「抑……ト申スハ」以外にも、モダリティを含む過去形「けり」直示表現である補助動詞「給フ」(「……下フ」と表記)、「故ニ」という因果関係の表現で語り手が感知できる。また、右に列挙した作中人物の感情に関する表現も、全知の語り手の口調として受けとめことが可能である。しかし、八郎満胤が赤城と伊香保の龍神の協力により、大蛇に変身し、兄弟の家

族と眷属だけでなく、さらに無関係の人々まで殺しているということまで語り進められると、語り手の存在が一層顕著になる。

其後國中ノ諸人執玉間、國中ノ歎キ、申計モ无ケリ。万人ノ悲ミ亡國ノ基成間、都ヘ此ノ由ヲ申タリケレハ、帝ハ大ニ驚カセ御在シテ(略)毎年ノ九月九日ニハ、高井ノ岩屋ノ池ノ餌ヲ懸ル間、國中ノ歎、喻取ルニ物ノ无シ。一年二年ノ事ニモ非ス、既ニ廿余年ノ事ナレハ、其國ノ人歎幾許ソヤ。此大蛇ノ池ノ餌ヲ留シニ、一ノ不思議アリ。

(一四〇)

語り手は「申計モ无ケリ」「喻取ルニ物ノ无シ」という決まり文句と「幾許ソヤ」という反語によって、上野国の住民たちという共同体の感情、あるいはその共同体を含んでいる全国共同体の代表者である帝の感情を強調する(その相互的な関係は「万人ノ悲ミ亡國ノ基成」でも表される)。「一ノ不思議アリ」という伏線(先説法 prolepsis)も語り手の存在を明らかにする。帝の宣旨の後、毎年に一回生贊を懸けることになり、ストーリーが展開する年には尾幡権守宗岡の娘の番になる。親子の悲しみも「喻取方ヲ无キ」(一五〇)という決まり文句で評価されることになる。

都から藤原宮内判官宗光が「金ノ使」として上野国を通ると、宗岡に尾幡邸に招待され、そして宗岡の娘である海津姫と恋に落ちるので、尾幡に残る。宗光は海津姫が生贊と定まつたことについてわからないが、海津姫が迫つてくる別れを大変悲しんでいる。

尾幡ノ姫ハ別レエン方ニ近ケレバ、常袖ヲソ<sup>〔終〕</sup>泣<sup>〔終〕</sup>。合初草ハ四月ノ初ノ事ナレハ、「我身ハ秋ノ初生贊ヘニ懸キ身ノカシ」ト思歎ツ、悲ケリ。〔略〕宗光見科トテ、「御心ニ移ル方ノ候ヤラン」ト言レハ、「自心ニ移ル方ノ有シニハ、咲ラハ含共涙ヲハ流シキ物ヲヤ。程无キ契、何ツマテ思ニコソ」ト計ニテ、聲立<sup>テ</sup>泣<sup>〔終〕</sup>。御前ノ女房達モ美女共、「今ノ別ノ始メコソ悲ケレ」トテ聲調<sup>テ</sup>泣立<sup>ヘ</sup>。

(一五〇)

繰り広げられるこの場面では、語り手が作中人物の感情に重点を置き、この物語で初めて会話文が導入される。会話が直接言説によるか、もしくは間接言説によって再現されるかにより、聞き手・読者の印象が大きく変わる。もつとも、原文に鉤括弧があるわけではなく、日本語の文法において直接言説と間接言説が常に判別できるわけでもない。係助詞「ぞ」「こそ」などは

主観的な表現であつても、語り手の言説にも多く使われているため、作中人物の直接言説の指標となりえない。また、先述のように「我」は話者に関連しない場合があるので、「我身」という表現はある程度参考にはなるかもしれないが、それだけで直接言説と判断することはできない。「自」も名詞とも人称代名詞とも解されるので、曖昧である。もつとも、感動詞「ぞかし」「を」(物ヲヤ)、直示表現「今」、後出する「あの」(「唆」と表記)などによつて、作中人物自身の言葉が再現されていることが明確である。とはいゝ、作中人物の視点と声は自立しているものではなく、常に語り手の視点と声に埋め込まれている。

宗光は生贊について知ると、自分が姫の身代わりになると主張し、夫婦と親子だけでなく、尾幡邸の従者と宗光の家臣までが大変泣き悲しむ。このような会話と感情を再現する箇所において、物語情報の量が増える——つまり、〈距離〉がより小さくなる。同時的に〈物語性〉〈経験性〉が高まる。また、尾幡邸に限定された空間とともに、発端部に三例ある「三(ケ)年」の代わりに「三(ケ)日」という表現が減縮した時間を代表する。

続いて、高井の岩屋へ出発する時が来る、「那波八郎大明神事」の〈語り〉の詳細さの度合いがまた少し増え、すなわち〈距離〉が小さくなる。  
 綱代輿、金威、稠<sup>キラメイ</sup>宗光、乗<sup>よ</sup>く、軍兵共<sup>ハ</sup>其數<sup>ハ</sup>「不知」、御輿、前後左右<sup>ヲ</sup>打圍<sup>ミ</sup>、京家<sup>ノ</sup>人<sup>ヲ</sup>十六人御友<sup>ノ</sup>殿原<sup>モ</sup>、主<sup>ノ</sup>別<sup>レ</sup>悲<sup>ケレハ</sup>輿<sup>ノ</sup>轍<sup>ヘ</sup>取付<sup>テ</sup>、泣<sup>ム</sup>歩<sup>ム</sup>哀也。姫君<sup>ハ</sup>同輿<sup>ニ</sup>乗<sup>ム</sup>道<sup>ヲ</sup>焦<sup>下</sup>哀<sup>ナ</sup>。〔略〕、語り連<sup>テ</sup>泣<sup>下</sup>哀也。

(一六〇—一六一)

長くないこの箇所において、「哀也」という語り手の感情に富んだ評価が三回も挙げられる。発端部の冒頭において、何年間にわたる出来事が語られており、物語の叙述が示す情報量は詳しくない。その冒頭の比較的弱かつた語り手の視点と、叙述が比較的詳しくなつたこの箇所における語り手の感情の表現を考えると、ジユネットの〈距離〉の定義による語り手の顕在性と叙述の詳細さという二つの基準の反比例関係は、少なくとも古典文学に関しても矛盾していることが明白になる。まして、語り手の顕在性のみではなくこの箇所において、「哀也」を定義するのはいかにも不適切であろう(二〇九—二一五頁)。

作中人物の感情が〈語り〉の中心にあるとはいゝ、焦点化は未だ成立しない。しかし、聞き手・読者が最初に焦点化として受けとめる可能性が高いところがある。

既<sup>ニ</sup>高井<sup>ノ</sup>岩屋<sup>ニ</sup>付<sup>ツ</sup>、宗光贊<sup>ハ</sup>ノ棚<sup>ニ</sup>昇<sup>テ</sup>、北向<sup>ニ</sup>坐<sup>ツ</sup>、水精<sup>ノ</sup>軸<sup>シタル</sup>法花<sup>經</sup><sup>ヲ</sup>紐<sup>ヲ</sup>解<sup>キ</sup>、打拳<sup>ハハ</sup>讀誦<sup>セラル</sup>。良且<sup>ク</sup>有<sup>セ</sup>テ、大蛇<sup>ハ</sup>石<sup>ノ</sup>戸<sup>ヲ</sup>押開<sup>テ</sup>出<sup>タリ</sup>。其<sup>ノ</sup>体<sup>タ</sup>見<sup>ルニ</sup>怖<sup>シケレ</sup>。首<sup>ハ</sup>真<sup>赤</sup>、漆<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>七ヶ八ヶ塗<sup>タルカ</sup>如<sup>シ</sup>テ、眼<sup>ハ</sup>赤雲<sup>ケル</sup>提<sup>ヨ</sup>闇<sup>ハメタル</sup>似<sup>リ</sup>。口<sup>ニハ</sup>銖<sup>ヲ</sup>差<sup>タルカ</sup>如<sup>シ</sup>。外<sup>ソニテ</sup>見<sup>ルニ</sup>身<sup>ノ</sup>毛弥<sup>ヨ</sup>立<sup>テ</sup>怖<sup>キニ</sup>、倍<sup>テ</sup>宗光<sup>ノ</sup>心<sup>ノ</sup>内<sup>推量<sup>セラレテ</sup>哀<sup>レ</sup>也。</sup>

而<sup>トモ</sup>宗光<sup>ハ</sup>少<sup>シモ</sup>恐<sup>タル</sup>氣色<sup>モ</sup>无<sup>クシテ</sup>、御經<sup>ヨリ</sup>外<sup>ハ</sup>眼省<sup>ル</sup>方<sup>モ</sup>无<sup>シ</sup>。 (一六〇)

〈語り〉の効果がうまく伝わるように適宜改行を入れた。大蛇を待つている宗光は法華経の紐を解き読誦を始め、続けて大蛇の姿の詳しい描写がなされるので、宗光の目で見る景色としてとらえることが可能である。緊張が高まるなかで、遠く見る人でさえ恐ろしさに毛が立つほどなので、宗光の気持ちを想像すれば大変だと、語り手は聞き手・読者に話しかけている。この時点で、大蛇の描写が宗光を通して焦点化されていたことがほぼ確実だろう。しかし、次に突然宗光は実はまったく恐怖を感じないまま、お経以外に視線を送つていないと、いうことが語られるのである。この箇所では珍しく語り手の戯れが展開する。まずは焦点化なされたと思しき方法で語り、まして宗光の気持ちを想像せよというふうに、この場面の緊張感を強調している。そして突然、実は焦点化なされていないことを明かす。すなわち、宗光は大蛇をそもそも覗いていないという情報が聴衆・読者を驚かせる。

大蛇は宗光による法華経の読誦を聞き、「黄<sup>ナ</sup>泪<sup>ヲ</sup>流<sup>シ</sup>」、神明になつて衆生を利益したいと言う。大蛇の言葉は「只今」(一例)「今ヨリ以後」、また「我」君<sup>ハ</sup>という直示表現によつて直接言説として明記されているものの、感情に重点を置いた〈語り〉に使われるような感動詞がない。結末部において、大蛇が那波八郎大明神として現れた後、他の作中人物がどうなつたか語られている。作中人物の視点がほぼ再現されない点では発端部と共通しているが、語り手の存在が更に顕在的である。

「那波八郎大明神事」の原文では、宗光を中心とした部分が八郎満胤を主

人公とする発端部よりほぼ三倍の長さになつていてもかかわらず、福田「九八四」（六九九～七〇一頁）の梗概において、発端部と展開部が同じ程度の分量になつていて、すなわち、出来事としてのストーリーに関する情報量が等しいとされている。先行研究では、そのような梗概を基に物語を論じることが多いが、〈語り〉の方法に目を向けると、〈物語〉として鑑賞する聞き手・読者にとつて宗光の話が肝要的であつたことを察することができる。また、「物語的縁起」は神仏に関する情報を伝承するだけでなく、あくまでも〈物語〉であるということがわかる。そしてナラトロジーの研究によつて、このような〈語り〉の方法が再評価できるのである。

## 六 「那波八郎大明神事」関連の在地縁起の〈語り〉

宗光が法華経を読誦する場面においては実にまれな語り口がなされている。それゆえ、『神道集』「那波八郎大明神事」の本文にもとづいている近世の写本に伝わる在地縁起ではどうなつていてるのかを見ていく価値がありそうだ。榎本千賀氏によると、「那波八郎大明神事」を取材とする在地縁起が二本あり、徳田和夫氏の研究にもとづいてそれらが所蔵されている地域によつて四類に分けられる（榎本「一〇〇六」二七七～二七九頁）。まずは元禄十二年（一六九九年）の奥書を持つている文久二年（一八六二年）の転写本『辛科大明神縁記』（徳田氏蔵）を引用する。

良暫<sup>ヤシタク</sup>有て、大蛇ハ石の戸を押ひらき出来ル。其形を見るにあやしけれ。顔ハしんの<sup>ウルシ</sup>添<sup>シタ</sup>にてぬれたる如し。眼ハ赤雲の晴間に似たり、口にハ朱を付たるか如し。外の者ハ見た斗りにて、身の毛よたつて<sup>アヤウキ</sup>危事なるに、宗光の御心の内こそ哀れ成と思はれる。

然共判官ハ少も恐れたる氣色も無、自御經を讀給ふ外にハ、まなこにみん方そなし。

（十三ウ～十四ウ）

ここでは本筋の軸どころか、宗光が法華経の読誦を始めることにさえ言及されない。また、大蛇の描写の前に、「其形を見るにあやしけれ」という語り手の評価が補われた。宗光の気持ちを想像せよ、いや実は宗光は怖くなかった、そもそもお経以外はどこも見ていない、という叙述が『神道集』に

共通する。『辛科大明神御縁起』（辛科神社蔵）では、ほぼ同文の個所がみられるとはい、「あやしけれ」などの語り手による評価がみられない上に、宗光の心を想像せよという呼びかけもない。すなわち、語り手が焦点化を強調すると思わせる戯れが失われている。

二つとも同じ部類に属する『上州群馬郡岩谷縁起』（前橋市立図書館蔵）と『上州群馬郡新波山満勝寺略縁起』（満勝寺蔵）では、大蛇の描写が『神道集』「那波八郎大明神事」と異なつていて、「まして宗光の心のうち、おしはかられて哀也。しかれ共、判官ハ少もおそるゝ氣色なく、御經讀誦し給ふ也」（『満勝寺略縁起』）による、変体漢文と和漢混淆文を混ぜた『岩谷縁起』（ほぼ同文）という叙述が『神道集』に共通する。しかし、大蛇の描写の前に「見る」という動詞（とそれに伴う「怖シケレ」「あやしけれ」などの評価）がなく、そして宗光が大蛇に目を向けてもいないことにも言及がない。この本文において焦点化はそもそも想定されないので、聞き手・読者の驚きもなく、〈語り〉としての効果がより低いといえよう。

しかし、『岩谷縁起』と『勝寺略縁起』に作中人物の視点がないというわけでもない。宗光が海津姫（尾幡姫）が大変悲しむのを見て容疑する件で、『神道集』の〈語り〉を少し補う。『神道集』にない叙述「目もあてられぬ風情也」のすぐ後に、『神道集』の「宗光見科<sup>ドテ</sup>」を「宗光是をみ給ひて」に替え、すなわち語られた感覚に重点を置き、頻繁に焦点化に導く表現を用いる。「目もあてられぬ風情」でも宗光が見る主体となつていて、『神道集』と異なる会話の後に皆が泣き、『神道集』にみられない「判官夢ともわきまへす」という言葉が宗光の混乱を描く。つまり、「み給ひて」の後に宗光を通して焦点化がなされたとみるならば、筋が通るはずだ。『神道集』と同様、この箇所は「判官此由聞給ひ……」で結ばれ、語られた感覚として、それも焦点化が維持できるものである。『岩谷縁起』と『勝寺略縁起』の当時の聞き手・読者がこの件に焦点化を受けとめた可能性はやや低いかもしれないが、本文に補つた言葉によつてその可能性がそもそも成立するのである。いずれにせよ、感情の描写によつて発端部と比べれば〈物語性〉の度合いがかなり高いこの件は、その感情への視線をはつきりとさせることによつて〈経験性〉を

更に増す。

『辛科大明神縁記』（九ウ一十一オ）に「其色を京家の宗光公ハ見とれてや」とあるが、作中人物の視線が示唆されたとはいえ、それは語り手の推量（や）によって相対化されているだけでなく、視線の対象（其色）が上にあるので、焦点化に導くような語られた感覺ではない。「聞し召」が同様であり、その後は作中人物の言葉が再現されると標示するにすぎない。また、「見せもせず」の場合も見る主体が具体化されないので、視点とほぼ関係がない。『辛科大明神御縁起』では「見とかめ」が『神道集』と共通するが、視点を生じさせる言葉を補つていらない。以上の分析から明らかになつたように、『辛科大明神（御）縁記』より『岩屋縁起』と『満勝寺略縁起』のほうが焦点化を重視するといえる。

〈物語性〉の低い資料を調査しても、右に分析したような〈語り〉の名残を見出しがある。変体漢文の『飯玉縁起』は恋という主題にまつたく言及せず、『神道集』において宗光と海津姫の話が一番詳しく語られるのに対して、『飯玉縁起』で福田氏が区分する〔発端〕〔展開〕〔結末〕の分量の割合はおおよそ等しく、構成上では梗概に似ている。『岩谷縁起』と『勝寺略縁起』が補足した件に通じる箇所では、「勅使被聞召」が二例あるが、既述のとおり、これは語られた感覺といつても、視点に関係がなく、直接・間接言説の前に置いた標記にすぎない。しかし、宗光と大蛇の対面場面に、「見給、大蛇岩戸押開出來。眼開、振頭、敲尾、抜舌、出贊懸。宗光有御覽、大乗真文云〔略〕」とある。「見給」はその後に描写される対象に関連するものとして、「みたまへば」という読みが適切であろう。すなわち、宗光の視点の指標として機能している。「宗光有御覽」はその感覺の反復的言及、焦点化の確認である。この視線はストーリーの展開に影響がなく、『飯玉縁起』で唯一の例である。つまり、〈物語性〉の低い本文でも、大蛇の描写と「見る」とが密接的な関係にある。

また、〈視点〉ではなく、〈距離〉に関して、『伊勢崎風土記』が興味深い。ごく短略な記事において、宗光の〈物語的〉な話に言及がないものの、八郎の成神が『神道集』よりも詳しく語られる。『神道集』に「其夜震動雷電シテ、

大雨ヲタラシ、大蛇ハ那波ノ郡ヘ下タテ、下村ト云處ニ神ト顕レ下テ」（一七オ）とのみある所で、『伊勢崎風土記』は次のように語る。

瞬目際大風揚レ石、震電霹靂、沛然雨注、拔樹碎レ巖、谿振山動、神竜冉々飛騰東方、光采璨爛現ニ於那波郡下福島、因設ニ叢祠於此處ニ而祀レ之

〔略〕

『伊勢崎風土記』において、類似性によつて虚構ととらえやすい恋の物語は完全に削除され、情報量の多い〈語り〉はむしろ神とその靈験の威力を強調する技法となつてゐる。

## 七 むすび

本稿は『神道集』を例に、中世日本文学研究とナラトロジーの交差による新しい研究成果の可能性を論じた。中世日本文学研究として期待できる成果は、〈語り〉の方法の再評価による文芸史への貢献である。本稿は、理論研究をふまえながら〈距離〉〈視点〉〈語り手〉といった範疇を応用し、『神道集』の〈語り〉、または在地縁起の〈語り〉について論究した。ナラトロジーの方法を用いることにより、梗概などでは見落とされがちな〈語り〉の特徴が視野に入る。また、ナラトロジーにも新しい研究成果が期待できる。通時的な比較によつて〈語り〉の技法の歴史的な展開の究明が可能となる上に、理論の再検討も可能である。本稿では『神道集』を基に〈語り手〉（第三節）と〈距離〉（第五節）の再検討を行なつたが、この考察により中世日本文学の理論的意義が尽くされたとはいえない。

『神道集』「那波八郎大明神事」の特徴として、〈焦点化〉がないとはいえ、珍しく語り手の戯れはみられる。焦点化の芽生えを含む在地縁起の資料と比べれば、宗光と大蛇の対面において「見る」ことが重視されていたことが明白になる。しかし、まれではあっても、『神道集』にも焦点化が見出せる。かぐや姫の異伝を語る第四十六章「富士浅間大菩薩事」の〈語り〉は、赫野姫が富士山の頂にある仙宮に帰つた後、「反魂香」箱だけ遺された夫の苦惱に注目する。

男ハ空キ床ニ留マリ居テ悲ケルカ、女ノ戀ク思フハ、此箱ノ蓋ヲ開テ見ル、其体カタ煙ノ

内ニ鬚カナリ。男弥ヨ悲ミテ、魂ヲ消ス事度ビム重レハ、思ヒニ堪ヘシシテ、富士山ノ頂ヘ  
上リツ、四方見レハ、ナル池アリ。ミノ中ニ嶋アリ。宮殿樓閣ニ似タル石多シ。其ノ  
池ノ中ヨリ煙立ケリ。其ノ煙ノ中ヨリ彼ノ女房体ノ鬚見ベタレハ、悲ノ余リニ此ノ箱ヲ懷ノ内  
ヘ引キ入テ、身ヲ投テ失ニケリ。

(九ウ)

垣間見の場面ではないものの、「見ルニ」「見レハ」「見ヘケレハ」と、男の語られた感覚の三例によつて焦点化が標記される。『神道集』とそのしばらく前に成立したと思われる真名本『曾我物語』に数多く共通する本文がほぼ「本地説」などだが、この富士浅間大菩薩の話は「物語的」な共通点として注目された(Mills 「一九七五」四三一～四四頁)。角川源義が「部分的には同文的な個所も發見されるが、直接の傳承關係を思はせるものではない」と判断する(一九七五)次資料一覽の角川「一九六九」二八八頁)が、右の引用に関しても決して同文ではない。しかし、表現が異なつていても、語られた感覚、つまり焦点化の構造は同じである。引用した表現が真名本『曾我物語』(妙本寺本)では「見ケレハ」「見二亘セハ四方を」「見レ之を」になつてゐる。全体的に同文ではなくても、〈語り〉の伝承として関係が深いと思わざるをえない。そういう意味で、本文批判とともに、ナラトロジーの分析も「伝承關係」の研究に貢献できるのではないかと考えられる。

注

- (1) 一九〇一八年に創立し、既に一八冊の特集を出したオンライン・ジャーナル *Beiträge zur mediävistischen Erzählforschung* (中世語り研究) などがある。
- (2) ナラトロジー研究の日本語訳に關しては、プリンス「一〇一五」所収の「参考文献一覽」が役立つ。
- (3) 筑土「一九六六」(一八五頁)は「公式的縁起」に「物語的分子」がないとしているが、大島「一〇一三」(三三一八頁)が指摘するように、「物語性を十分に有する」例外もある。
- (4) 挙著では「の三つの概念に加えて、日本文学に即したもう一つの範疇〈確實性〉(独 *Bestimmtheit*, 英 *determinacy*)を提案したが、中世の〈物語〉よりも平安時代の物語文学に関連があるので、別稿で紹介する。
- (5) 挙著「一〇八、一二〇～一二一頁、ジュネット「一九八五a」二一七～二二一頁参考照。
- (6) 一二一～一二二頁、ジュネット「一九八五b」八一頁参照。

※ 原文の引用にあたり、適宜句読点を加え、あるいは読点を句点に改めて作中人物の言説を標示する鉤括弧を付した。

赤木文庫本『神道集』

近藤喜博・貴志正造(編)「一九六八」「赤木文庫本 神道集」角川書店(貴重古典籍叢刊1)

『伊勢崎風土記』

樋口千代松・今村勝一(編)「一九一七」「上野志料集成」一、煥乎堂本店

『辛科大明神縁記』(徳田和氏藏)

徳田和夫「一九八四」「神道集」「那波八郎大明神事」の一在地資料——架藏本「辛科大明神縁記」の紹介と翻刻——渡邊昭五・福田晃(編)「伝承文学の視界——歌謡・説話・絵解をめぐる」三弥井書店(三弥井選書13)

『辛科大明神御縁起』(辛科神社藏)・『飯玉縁起』(倉賀野神社藏)

徳田和夫「一九八四」「神道集」「那波八郎大明神事」の形質——附・辛科神社藏「辛科大明神御縁起」の紹介と翻刻——『国語国文論集』一二

『上州群馬郡岩谷縁起』(前橋市立図書館藏)・『上州群馬郡新波山満勝寺略縁起』(満勝寺藏)

大島由紀夫(編著)「一〇〇〇-1」「神道縁起物語(1)」三弥井書店(伝承文学資料集成6)

妙本寺本『曾我物語』

角川源義(編)「一九六九」「妙本寺本 曾我物語」角川書店(貴重古典籍叢刊3)

参考文献

- 有賀夏紀「一〇一五」「中世神仏の文芸と儀礼」文学通信  
榎本千賀「一〇〇六」「神道集」卷八～四十八話「上野国那波八郎大明神事」と寺社縁起」『古代中世文学論考』一七  
大島由紀夫「一〇一三」「神道集の縁起叙述」徳田和夫(編)『中世の寺社縁起と参詣』竹林舎  
菊地良一「一九八九」「神道集」における唱導説話の形成——鎮守神と神観念——『駒沢國文』二六  
貴志正造(訳)「一九六七」「神道集」平凡社(東洋文庫94)  
ジュネット・ジェラール(Genette, Gérard)「一九八五a」「物語のディスクール——方  
法論の試み」花輪光・和泉涼一(訳)書肆風の薔薇(叢書記号学的実践2)

- 「ガネツ・ジ・ワール (Genette, Gérard) [一九八五] 『物語の詩学——統・物語のディスクール』和泉涼・神郡悦子 (訳) 書肆風の薔薇 (叢書記号学的実践3) 陣野英則 [一〇一六] 「ナホーロジーのいれかみ『源氏物語』——人称をめぐる課題を中心にして」助川幸逸郎・他 (編) 『架橋する〈文学〉理論』竹林舎 (新時代) の源氏学9)
- 高木信 [一〇〇一] 『平家物語——想像する語り——』 森話社  
筑土鈴寛 [一九六六] 『中世藝文の研究』 有精堂出版
- 二本松康宏 [一〇一四] 『諷訪信仰の変奏——中先代の乱から甲賀の郎神話へ——』 二本  
弥井書店
- 福田晃 [一九八四] 『神道集説話の成立』 二本  
プリンス・ジ・ワール (Prince, Gerald) [一〇一五] 『改訂 物語論辞典』 遠藤健一 (訳) 松柏社
- 松本隆信 [一九九六] 『中世における本地物の研究』 沢古書院  
村上學 [一〇〇六] 『中世宗教文学の構造と表現——佛と神の文学——』 二本  
Balmes, Sebastian [一〇一〇] Linguistic Characteristics of Premodern Japanese Narrative: Issues of Narrative Voice and Mood. In: idem (譯) *Narratological Perspectives on Premodern Japanese Literature*. Oldenburg: BIS-Verlag (BmE Special Issue 7)
- Balmes, Sebastian [一〇一〇] *Narratologie und vormoderne japanische Literatur*. Berlin/Boston De Gruyter (Worlds of East Asia 32)
- Coulmas, Florian [一九八四] Direct and indirect speech in Japanese. In: idem (譯) *Direct and Indirect Speech*. Berlin/New York/Amsterdam: Mouton de Gruyter (Trends in Linguistics: Studies and Monographs 31)
- Fludernik, Monika [一九九六] *Towards a 'Natural' Narratology*. London/New York: Routledge
- Lämmert, Eberhard [一九七九] *Bauformen des Erzählens*. Stuttgart: J. B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung (新出版・大正出版)
- Martínez, Matías · Scheffel, Michael [一〇一四] *Einführung in die Erzählttheorie*. München: C. H. Beck (初出一九九九年)
- Mills, D. E. [一九七九] Soga Monogatari, Shintōshū and the Taketori Legend: The Nature and Significance of Parallels between the *manabon Soga monogatari* and *Shintōshū*, with Particular Reference to a Parallel Variant of the Taketori Legend. In: *Monumenta Nipponica* 11|〇—
- Moretti, Laura (譯) [一〇〇六] *Narrativity and fictionality in Edo-period prose literature*. *Japan Forum* 11|一—11 (特集) (1〇一〇年刊行)
- Ryan, Marie-Laure [一〇〇七] Toward a Definition of Narrative. In: David Herman (譯) *The Cambridge Companion to Narrative*. Cambridge University Press
- Steineck, Christian [= Raji C.] · Müller, Simone (譯) [一〇〇六] *Narratologische Unter-*

*suchungen zu japanischen Texten. Asiatische Studien – Études Asiatiques* 45|1|—11 (特集)

Takeuchi Akiko (竹内晶子) [一〇〇七] *Ritual, Storytelling, and Zeami's Reformation of Noh Drama: Issues on Representation and Performance*. ローランド大学の博士論文 Watson, Michael [一〇〇一] *A Narrative Study of the Kakuichi-bon Heike monogatari*. オックスフォード大学の博士論文

Watson, Michael [一〇〇四] Theories of Narrative and their Application to the Study of *Heike monogatari*. In: Baxter, James C. (譯) *Observing Japan from Within*. Kyoto: International Research Center for Japanese Studies (Japanese Studies Around the World)

本稿は、国際交流基金のフェローシップを受けて早稲田大学で滞在した際、一〇一四年七月一〇日に角田柳作記念国際日本学研究所の主催によって開催された講演会での講演によるものです。コメントをいただいた徳田和夫氏、司会の陣野英則氏、所長の河野貴美子氏、査読者の方々をはじめ、意見をいただいた方々に感謝申し上げます。

# On the Potential of Combining Narratology and the Study of Medieval Japanese Literature: Re-Examining Narrative Theory and Textual Analysis Based on the *Shintōshū* Chapter “On the Great Bright Deity Hachirō of Nawa”

Sebastian BALMES

## Abstract

While recent research of European medieval literature actively engages with narrative theory, there are but few studies of medieval Japanese literature that pursue a narratological approach. This article uses the tale “Nawa Hachirō daimyōjin no koto” (“On the Great Bright Deity Hachirō of Nawa”) from the mid-fourteenth-century collection *Shintōshū* as an example to demonstrate how combining the study of medieval Japanese literature and narratology can lead to both theoretical insights as well as a deeper understanding of narration in premodern Japan. The *Shintōshū* is particularly well-suited for this kind of investigation as numerous variants of its tales survive. From a theoretical point of view, the *Shintōshū*’s nature as a collection comprising both narrative and non-narrative parts is particularly noteworthy, since this structure has important implications for a theory of the narrator.

Hitherto, research on narration in Japanese literature has mostly relied on “classical” narratology, even though some scholars vaguely refer to its deficiencies. Instead of adhering to one specific theoretical model, it seems more promising to take contemporary, so-called “post-classical” narratology as a starting point. Moreover, since preceding research on the *Shintōshū* has analyzed the tales in terms of story rather than discourse, this article focuses on major concepts related to narrative discourse—distance, perspective, and narrator—to shed light on narrative techniques that have been overlooked. These theoretical concepts are first introduced based on current research, correcting inconsistencies of structural theories such as the one by Gérard Genette, while paying special attention to characteristics of premodern Japanese narrative. This theoretical section is followed by a narratological analysis of “Nawa Hachirō daimyōjin no koto,” which exhibits not only varying degrees of narrativity, but also a rare instance in which the narrator seems to imply focalization, only to reveal that this was not really the case. In addition, a comparison with local variants of the tale (*zaichi engi*) shows that while in studies of premodern Japanese literature “influence” has mostly been explained in terms of direct quotations or shared plot structures, it is also possible to detect influence through narrative techniques.